

會學濟經學大國帝都京

# 叢論濟經

號六第 卷二十第

行發日一月六年十正大

## 論叢

中世都市の發達

文學博士 三浦 周行

社會的法的經濟學の考察

文學博士 米田庄太郎

純理上より見たる財産重課の理由

法學博士 神戶 正雄

戰後獨逸の社會主義運動

法學博士 河田 嗣郎

## 時論

増俸の研究

法學博士 小川郷太郎

## 說苑

我國農產物生産調査に就いて

法學博士 高岡 熊雄

舊岩國藩の製紙原料保護政策

經濟學士 吉川 元光

所得と勞賃

經濟學士 堀 經夫

## 雜錄

史的唯物論略解

法學博士 河上 肇

Zimmermannの政治測量

法學博士 財部 靜治

勞働組合主義變轉の傾向

法學博士 河田 嗣郎

附錄

本誌第十二卷總目錄

## 労働組合主義變轉の傾向\*

河田 嗣 郎

職工組合主義ツレド、ユニオンイズムといへば、從來は即ち之れ經濟組織の現狀を是認し、制度としては現時の資本主義制を維持し乍ら、たゞ其の組織の下に於て諸種の職業に従ふ労働者の境遇を改善し、其の労働條件を労働者につけて有利なるものたらしむることを目的とするものと了解せられた。成程職工組合主義も社會主義思想の發展に連れて、少からず其の思想に依て影響せられる所は

\* 本論は The Fortnightly Review, No. DCXLIX N. S. 所載 The Changing Outlook of Trade Unionism, by A. W. Humphrey を抄譯したものである。本誌第九卷一號、二號、四號及び第十卷一號所載拙稿ギルド社會主義に關する諸論と併せ讀むて戴きたい。

あつたけれども、然し大體に於てそがたゞ現時の資本主義に對する防禦を爲すを以て眼目とし、新たなる經濟組織を齎すべき改造の方針を建つるを以て任務とするものに非ざることは、依然として變らざる所であつた。

然るに此の傳統的の立場は、最近に至つて大いに變轉せんとするの傾向を示して來た。而してそれは一面に於ては、在來の職工組合主義の行詰りを意味し、之に對する多數勞働者の不満足に依て促されたる傾向たると同時に、之を其の反面より觀れば、勞働者が眞實に其の實力を自覺し、經濟組織の中に於ける其の地位と任務とに對する自信を獲、彼のサンデカリズム流の思想に促されて、現時の生産組織そのものに對する根柢的改造の必要を感じるに至り、或意味に於ては、社會主義思想に依て打勝たれたることを意味するものと見なければならぬ。

而して此の方向轉換の勢を導き、新しき方向を指示しつゝある所のは、彼のギルド社會主義である。ギルド社會主義は人も知るが如

く、現今勞働の自由に對して最も大いなる障礙を爲すものは、勞働雇傭制に外ならずとし、その廢止に依つて、勞働者に自主的産業管理權を獲得せしめ、新たに一の産業自治制を布かんとを以て立場とする。されば此の變轉は職工組合主義が在來の防禦的立場を離れて、攻撃的態度に移りたることを意味するものと見なければならぬ。從て其の今後に於ける組織は從來の如く職業の區別に沿ふて行はるゝことなく、産業の種別に沿ふて行はるゝことゝなる外はない。從來の職業的勞働組合主義に對して、新たに産業的勞働組合主義の旗幟の樹立せられつゝあるは、之が爲めである。

仍て之を按ずるに、近年勞賃増加は可也著明なるものがあるけれども、物價騰貴の勢は遙かに之を凌駕し、勞働者等は益々以て生活に對する激しき奮闘を行はねばならなくなりつゝある。賃金が幾ら増しても、賃金制度が續く限り、それは物價との際限なき然かも絶望的なる競走たるに外ならぬ。そして又ストライキは近

者益々大規模になりつゝあるが、其の効果は大低豫期を裏切り、然かもそが大規模となれるが爲めに常に結局は政府の干渉を買ひ、政府を相手に戦ふことゝなつてしまつた。そして、政府は其の強大なる力を以て常に運動を抑壓するに成功せざる時はない。更には又労働黨が政黨として行ふ所を見れば、常に失望と憤慨の種ならざるはない。

斯かる事情の下に新しき福音は傳へられ、労働組合主義に對して新局面を展開すべき希望が鼓吹せられ、之に對する運動の方法も指示せられることゝなつた爲めに、勢は驀地に方向を轉換することゝなつたのである。

ギルド社會主義の説く所は、元來そが労働組合主義に立脚し、労働者の組合團體を以て新生産組織の基礎と爲し、生産に關しては其の自治的活動を以て命脈と爲さんとし、然かも他方經濟以外の政務は之を國家の任務として殘し置き、労働團體と國の政府とは常に完全なる協調の下に事務を行ふことゝせんとするものなる

が故に、其の主張は、サンヂカリズムよりも、國家社會主義よりも、遙かに通りのよいものとして迎へられた。そしてそがサンヂカリズムの如く國家組織を否定せず、又労働者の團體といふ中に智識階級を排斥せず、精神労働者と肉體労働者とを共に包容し、つまり現實に働く者の支配する組織を造り出すべしと主張することは、所謂労働者以外の者の同情をも買ひ得る所以となつた。又そが國家社會主義に附き物として嫌はるゝ所の官僚制の弊害を去らん爲めに、労働團體の自治制を主張することは、フアビアニズムに鬱蒸せられたる労働者の心理に、清風を送る所以となつた。

斯くてギルド社會主義は労働組合主義の本家本元たる英國に於て、忽ちにして地盤を固め得ることゝなつたのである。

惟ふに富は力である。労働は富を生産する。従て力は労働を支配する者の之を占有する所となる。然るに現時に在つては資本が労働を支配しつゝある。かるが故に國家は資本家の手中に

在る。若し勞働が社會に於ける眞實の方たらんと欲せば、勞働はそれ自ら支配せなければならぬ。換言すればそれは一の獨占力とならなければならぬ。ギルヅメンは勞働組合が此の標的に向つて進み行かんことを勸説するのである。現時の雇傭制を廢止し、雇主なるものを除却せんが爲めには、彼等をして不必要のものたらしむる外はない。彼等を不必要のものたらしむるには、勞働者自ら産業管理を爲し得べき實力を養ひ又その組織を造り上ぐる必要がある。勞働組合の向上と、ナンヨナル、ギルヅの組成との必要なる所以實に此所に存する。

即ち彼のサンデカリズムは餘りに生産者本位であつて、消費者の利益の顧慮されざる嫌ありさればとてコレクティヴィズムは餘りに消費者本位で、國家は消費者の利益を進むるに急、やはり依然として勞働者は、雇傭制の下に頭の擧がらぬこととなる外はない。されば一方生産者の利益と他方消費者の利益とを圓滿に調和せしめて、社會全體 整つた發達を遂げるには、勞

働者の自治團體と國家の政府との共同作業の行はれる組織を造る外はないとするのである。

英國の勞働組合主義は此の大きいなるインスピレーションに依て蘇生し、今や現實に方向轉換を行はんと努めてある。

鑛業勞働者と鐵道從業者とは、國家と共に其の産業の共同管理を行はんことを要求しつゝある。郵便業務從事者亦然り。エンヂニアース、造船勞働者、衣服製造勞働者、車輛製造勞働者、建築勞働者などの間には、各々從來の職業的小勞働組合主義を捨て、大同團結を行ひ、コールの所謂大組合主義に入らんとするの運動が漸次成功しつゝある。更に進むでは總勞働者組合の設立をも見る勢を呈することゝなつた。

要するに問題は議論上の問題ではなく、事實上の問題である。事實上の問題として、從來の職工組合主義は行結まり、新たな主義の下に新たな方針が求められて、然かも之れが與へられた。或は、與へられつゝある。前途も之を事實に徴して見る外はない。